

12 庶民のお金

小さな額面の金貨・銀貨の登場

Issuance of Coins in Small Denominations

小額金貨・銀貨の発行

Gold and Silver Coins in Small Denominations

江戸時代後半には、米だけでなく、各地でつくられたさまざまな商品が全国で流通するようになり、人々が貨幣を使う機会が増えた。幕府は小額面の計数銀貨・銀貨を新たに発行して需要に応えた。

計数銀貨の発行

18世紀後半に幕府の実権を握った田沼意次は、それまで使われてきた秤量銀貨を回収し、代わりに両建ての計数銀貨「明和南鐐二朱銀」を発行し、計数銀貨を金貨の補助貨幣とした。



明和五匁銀
Meiwa Gomomegin
(Silver)
1765年
品位46%

幕府は五匁銀12枚(60匁)＝金1両に相場を固定しようとしたが、それまで金銀相場の変動で利益を得ていた両替屋の協力が得られなかったことなどからうまく流通しなかった。



明和南鐐二朱銀
Meiwa Nanryo Nishugin
(Silver)
1772年
品位98%

「南鐐」は良質の銀の意味。この銀貨8枚で小判1両と交換すると書かれている。金貨との引替えの際、両替屋や金貨の保有者に利益が出るように便宜を図ったこと、また小額面で使いやすかったことから流通が進んだ。

小額金貨の発行

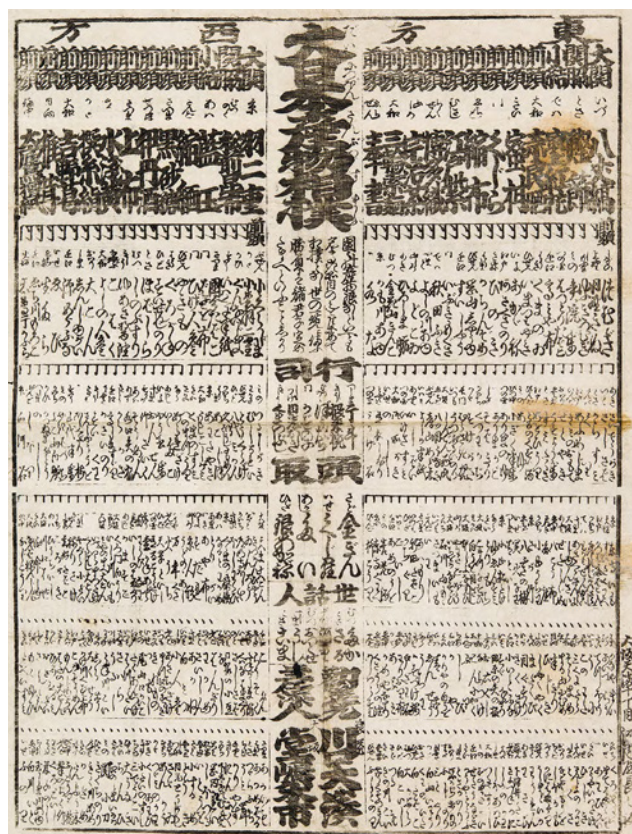
小額面の貨幣が使われる機会が多くなったことなどから、幕府は新たに1両の16分の1にあたる一朱金を発行した。



文政一朱金
Bunsei Isshukin (Gold)
1824年
品位12%
極めて質の悪い金貨。



文政南鐐一朱銀
Bunsei Nanryo Isshugin (Silver)
1829年
品位99%
一朱金が粗悪で不評であったことから、一朱として通用する銀貨を発行した。金貨の単位の計数銀貨が浸透していった。



「大日本産物相撲」
Ranking of Products from the Various Regions of Japan
商品作物の生産が全国に広がり、各地の特産品番付がつくられた。伊豆の八丈蒔、京の羽二重、土佐の鯉節、陸奥の松前昆布、出羽の最上紅花、阿波の藍玉などの名前がみえる。

都市の生活とお金

都市に住む武士や町人などは、日々の暮らしに必要な食べ物や衣類などの生活必需品を自分ではつくらず、貨幣で買う生活をしていた。参勤交代で江戸に滞在した各藩の武士は、日用品や国元の家族・同僚から頼まれた品物を買ったり、外食を楽しんだりした。

銭さしでの支払い

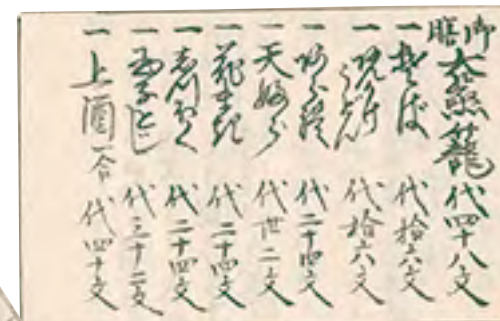


袋もの類(財布など)を買う様子

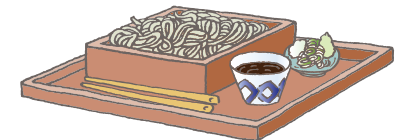


呉服を買う様子

そば屋の品書き



『守貞謄稿』より 国立国会図書館蔵



そば	16文
あんかけうどん	16文
玉子とじ	32文
上酒1合	40文

棒手振り(野菜売り)の生活

江戸の町人の多くを占めたのは、路地裏の裏長屋で借家住まいをする人々で、その日の稼ぎで毎日の食料などを買っていた。



残額 100～200文…酒代か雨の日の生活費か

【柳菴雜筆】より



棒手振り

村の生活とお金

江戸時代後半になると、農村でも商品作物を栽培して販売し、その代金で農具や肥料、日用品を買う生活が徐々に広がっていった。

村の四季の支払いの一例 ー武蔵国のある家の記録よりー				
1月～3月	お年玉、寺社への出金、野菜の種・苗	みつば種	16文	
4月～6月	野菜の種・苗、年貢金	なす苗	100文	
7月～9月	年貢金、盆支度	灯明料	200文	
10月～12月	炭、家財道具の修理	炭1俵	332文	
その他	豆腐、醤油、酒、鯉節、紙、薬など	酒5合	72文	



13 お札をつかう

各藩で発行された紙幣
Issuance of Clan Notes

藩札の移り変わり

Transformation of Clan Notes

藩 札は、藩が幕府の貨幣や米など価値のある物との交換を保証し、領内で通用させた紙幣である。
藩札の発行は17世紀後半から始まり、明治時代初めまでに西日本を中心に200余の藩が藩札を発行した。
藩内外の有力商人が発行を請け負うこともあった。

初期の藩札

〔17世紀後半に発行された藩札〕
Clan Notes Issued
in the Late 17th Century



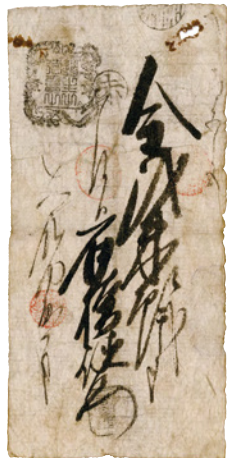
幕府は1707年、幕府が発行する金属貨幣の流通を促すため、藩札の使用を禁止したが、その頃までに40以上の藩が藩札を発行していた。



藩札の広がり

〔さまざまな単位の藩札〕
Clan Notes of Various Units

幕府は1730年に藩札の使用禁止を解除し、再び全国で藩札が発行されるようになった。
藩札はさまざまな単位で表示され、金属貨幣の単位のほか米や地方の特産品を単位とするものもあった。



両建て(金)
Unit of Gold (Ryo),
Hachinohe Clan Note
陸奥八戸藩札



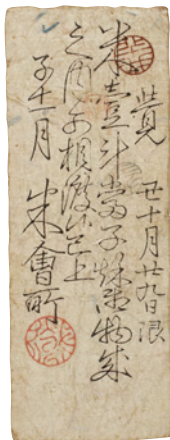
勾建て(銀)
Unit of Silver (Momme),
Kanazawa Clan Note
加賀金沢藩札



文建て(銭)
Unit of Copper (Mon),
Morioka Clan Note
陸奥盛岡藩札



銭勾札
Unit of Copper (Semme),
Akizuki Clan Note
筑前秋月藩札



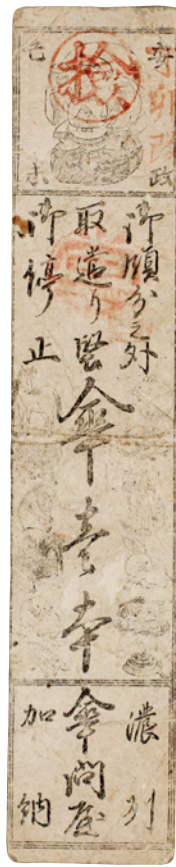
米札
Unit of Rice,
Saga Clan Note
肥前佐賀藩札

藩札発行の主な理由

多くの藩は地域での貨幣需要を賄うために藩札を発行した。
産業振興に藩札を活用する藩があった一方、財政赤字補てんのために藩札を過剰に発行する藩もあった。



伊予大洲藩札
Ozu Clan Note

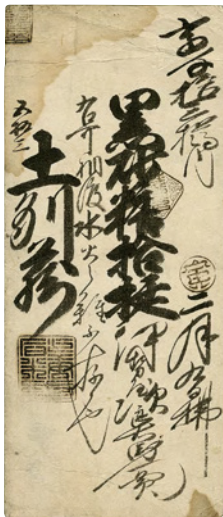


〔特産品の生産と藩札発行〕
Production of Local Specialties
and the Issuance of Clan Notes
領内の特産品を藩札で買い上げ、
藩外で売って得た代金を兌換準備
にあてる藩もあった。これらの藩
は、領内での金貨・銀貨の使用を
節約するとともに、領内の産業を
盛んにしようとした。

傘札 美濃加納藩札
Unit of Umbrella, Kano Clan Note
加納藩では、幕末にかけて特産品の傘の
専売制度を設け、傘やその部品のかせ糸
などの数量を額面とする藩札を発行した。

memo 藩専売制

「国産会所」や「産物会所」などとよばれる
藩の役所が領内の生産者に藩札を貸し付け
て特産品などの生産を行わせ、これを独占
的に集荷し、売上金を藩の収入とした。



黒砂糖切手
土佐藩が商人に黒砂糖を売り渡したことを示
している。

〔財政赤字と藩札発行〕 Fiscal Deficit and the Issuance of Clan Notes
財政赤字が膨らんだ藩は、藩士や領民への支払いのために藩札を過剰に発行し、
金貨・銀貨との兌換が滞ることがあった。このような藩札の価値は下落すること
が多く、領民から受け取りを拒否されることもあった。



陸奥会津藩札
Aizu Clan Note



陸奥仙台藩札
Sendai Clan Note

memo 藩札の額面表示

18世紀後半以降、両建ての計数銀貨が導入され、勾建ての秤量銀
貨はほとんど使われなくなっていったが、その後も、西日本を中心
として、勾建ての銀札が多く発行された。



銭勾札 肥後熊本藩札

券面に「銭〇勾」と記された藩札(銭勾札)もあった。これは、一定の枚
数の銭を銭1勾と数えるもので、銭何枚を銭1勾とするかは藩ごとに異
なっていた。

14 さまざまな江戸時代の紙幣

Varieties of Paper Money During the Edo Era

さまざまな紙幣発行者

Who Issued Paper Money?

江戸時代には、藩だけでなく、さまざまな主体が紙幣を発行した。現存する日本最初の紙幣は、伊勢地方の商人によって発行されたものであった。旗本や公家、寺社なども、自らの領地で紙幣を発行した。また、鉱山や宿場など特定の地域で商人などが紙幣を発行することもあった。

初期の私札

初期の紙幣は、17世紀初めに商業が盛んな伊勢や畿内で商人などが発行した。

伊勢地方の商人は、銀貨との交換（兌換）を保証する言葉および額面金額を記載した紙片（端書＝羽書）を用い、これらが周辺地域で流通するようになった。発行された伊勢山田の地名から山田羽書とよばれている。

◆山田羽書発行の舞台裏

伊勢神宮の門前町では、中世から商業が盛んであった。御師とよばれた神職は、布教や参拝客の宿泊の世話などを行う一方、商品の流通や為替取引も担う商人であった。

山田羽書 江戸時代を通じて発行された私札

現存する日本最初の紙幣「山田羽書」は、17世紀初めに、伊勢神宮の門前町の商人（御師）が発行し、商人の信用力を背景に江戸時代を通じ流通した。

【各時期の山田羽書】

Yamada Hagaki Private Notes in Various Periods



版木
Seal of Yamada Hagaki Private Note

発行年

「戌」
1610年と推定されている

「小はかき」(羽書)
端数金額の書き付けの意味

発行者名
「山田大路長右」



「丁銀」

額面
「伍分請取」
5分=1/2匁の預り証

発行者の印

概要
(この羽書と引換えに銀を渡す。あとで間違いを申し立てても受け付けない。羽書の有効期間は2年)

17世紀初め



1697年



1736年



1798年



1836年



1863年

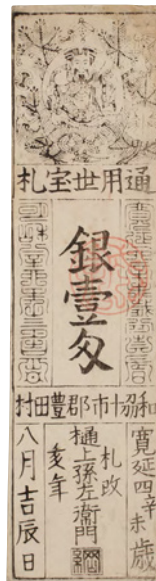


伊勢山田羽書
Yamada Hagaki Private Note



大和下市銀札
Shimoichi Ginsatsu Private Note

多様な紙幣



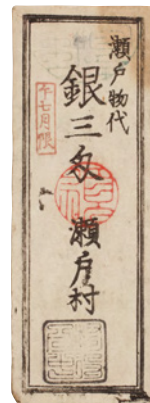
旗本札
大和豊田 佐藤氏
Note Issued by a Vassal of the Shogun



寺社公家札
大和法隆寺
Note Issued by a Temple/Court Noble



寺社公家札
山城嵯峨御所
Note Issued by a Temple/Court Noble



町村札
尾張瀬戸村
Note Issued by a Village

【特殊用途の藩札】 Clan Notes for Specific Occasions
鯛札や昆布札とよばれる播磨姫路藩の藩札は、主に贈答や儀礼のために使われた。



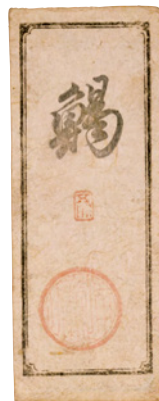
宿場札
東海道・駿河藤枝宿
Note Issued by a Post Town



鉱山札
但馬生野銀山
Note Issued by a Silver Mine Owner



播磨姫路藩 昆布札
Himeji Clan Note, Unit of Kombu



播磨姫路藩 鯛札
Himeji Clan Note, Unit of Dried Squid

memo

中国での紙幣発行

北宋から明代初期にかけて政府が発行した紙幣が主要な通貨として流通したが、それ以降は減少した。



明の紙幣 大明通行宝钞

memo

ヨーロッパでの紙幣発行

スウェーデンのストックホルム銀行は1661年に銀貨や銅貨との兌換を約束する世界初の銀行券を発行したが1668年に破産した。その後を受けて設立されたリクスバンクは18世紀初めまで銀行券の発行を禁止された。



ストックホルム銀行券

偽札を防ぐ技術

Anti-counterfeiting

江戸時代から、紙幣が流通するようになった。

紙幣に使う和紙は、破れたり擦り切れたりしにくい丈夫なものが選ばれた。

偽造を防ぐために、和紙を漉く工程や版木などにさまざまな工夫が施された。

藩札用紙の工夫

すかしを入れたり紙に色を付けるなど、偽造を防ぐための工夫がみられる。



裏から光をあてた状態

長門長府藩札



すかしを入れるための道具「簾」

竹ひごを糸で編んだ簾と、生糸で織られた「紗」でできている。紗には「長」のくずし字の型が取り付けられている。紙を漉いたとき、型の部分の紙が薄くなり、すかしができる。

印刷の工夫

偽造を防ぐため、版木を分割管理したり、版木に小さな文字を入れたり、さまざまな色のインクを用いるなどの工夫が施された。



摂津尼崎藩札 版木



摂津尼崎藩札

分割できる版木

江戸時代の紙幣の版木には、複数に分割されたものもあった。別々の人が版木を管理することで、偽造される危険性を減らした。

隠し文字



筑後柳川藩札

藩名が目立たないように印刷されている。

特殊文字



伊予大洲藩札

まねしにくい、特殊な文字が使われている。

多色刷り



因幡鳥取藩札

多色刷りにして、偽造を防止している。

お金を贈る

Money as a Gift

金貨・銀貨・銭貨は、献上や下賜などの贈答の場面でも使われた。江戸時代の絵画のなかには、和紙に包まれた金貨・銀貨（包金・包銀）が授受されている様子が描かれている。

贈られた金貨・銀貨

金貨・銀貨を贈答に使うときは、和紙に包み、表に貨幣の種類と数量が墨書された。



「尾上松助 和田しづま」

主君より銭別に小判包をもらう武士
敵討ちに向かう和田しづまに、主君菅田内記が銭別として折敷に載せた金百両包を与える場面。



「御上洛二付拝領銀被下置候事」

将軍が京の町人に包金を贈る場面
将軍徳川家茂が1863年に上洛した際、銀5,000貫目を京の町人に与えた場面を描いた瓦版。瓦版によれば、実際に将軍が与えたのは、「銀五千貫目」に相当する金貨「二歩判 金六千二百両入」10箱と「紙包 金百両包」10包であった。



包金 小判五十両包

和紙に小判50枚が包まれている。



包金 二分金百両包

二分金200枚が包まれている。



包銀 銀三枚包

秤量銀貨の包紙の表には、銀の単位「枚」(1枚=43匁)が書かれた。包みの中には重さを微調整するため、丁銀とともに豆板銀が入っている場合もある。

贈られた銭貨

銭貨を贈答に使うときは、形が整った良質の銭貨を紺に染めた紐に通した「青ざし」が使われた。



青ざし 300文ざし

普通の銭ざしと比べると、銭貨の周り(側面)がきれいに揃っている。



普通の銭ざし 100文ざし

15 お金の使われ方

Money and Daily Life in the Edo Era

節季払い

Seasonal Payment

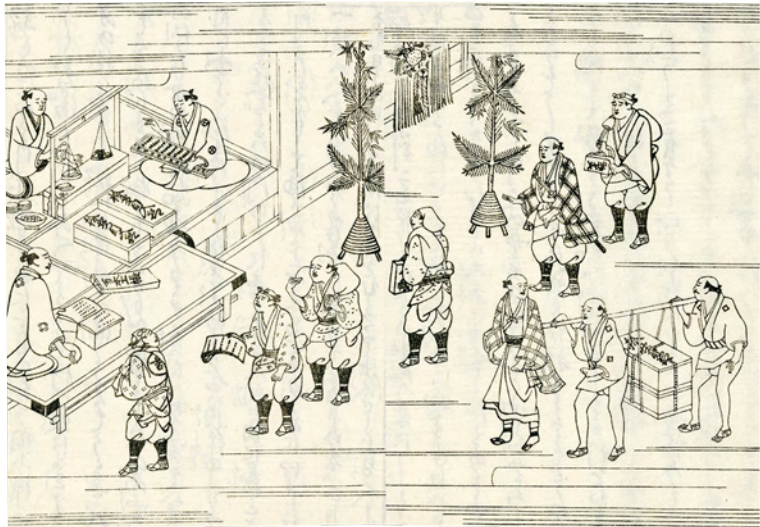
江戸時代後半には、全国的な商品流通が活発になった一方で、流通していたお金の量は不足気味で、また、季節により必要なお金の量に波があった。こうしたなかで、食料などを「付け」「掛け」で買い、盆暮れや収穫期などにまとめて支払う「節季払い」の慣習が広がっていった。

【買い物と通帳】
Account Books for Daily Shopping

顧客は「通帳」を持って店へ行き、通帳に月日・品名・金額などを記入してもらうこと（「付け」）で酒や野菜などを買った。現在のボーナス一括払いと同じように、支払いは盆暮れや秋の収穫期などにまとめて行った。



【さまざまな通帳】 Various Account Books
1つの家で、八百屋や酒屋などそれぞれの商店の通帳を持っていた。支払いが終わると支払い済みの印がつけられた。



【大晦日は一日千金】 Payments on the Last Day of the Year
『世間胸算用』
井原西鶴『世間胸算用』の副題は「大晦日ハ一日千金」である。集金日である大晦日に場面を設定し、金銭をめくり展開する借金取りや町人の悲喜こもごもの生活を描いている。



【通帳と酒樽を持った小僧】
A Shop Boy Holding an Account Book and a Sake Barrel
『中村芝翫九変化ノ内（酒屋の小僧）』 国立歴史民俗博物館蔵

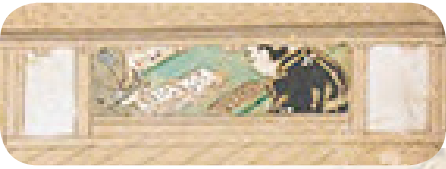
商いと大福帳
「付け」で買った顧客に商品を売った店ではその内容を帳簿（大福帳）に「掛け」売りとして記入し、盆暮れなどに、その帳簿をもとに代金を回収した。商人同士でも同じような方法により、売買の決済を行った。

【大福帳を持って年末に集金してまわる商人】 Collecting Bills at the End of the Year



「十二月風俗図屏風」
早稲田大学図書館蔵

江戸時代の12ヶ月の風俗を描いた絵画。12月の場面は、大福帳を持った掛け金取り（集金人）が描かれている。



「月次風俗諸職図屏風」 堺市博物館蔵

商いの方法 「現金掛け値なし」とは？

掛け売りは現金販売よりも値段が高くなるが多かった。また実際の値段より高く付けられた値段のことを「掛け値」といった。掛け売りをしないで現金で売り、掛け値ではなく定価で売ることを「現金（銀）掛け値なし」といった。



「げんきんかけねなし」の看板を掲げた呉服屋
Kimono Shop's Sign "No Surcharge on Cash Sales"
呉服屋では誰でも同じ価格で現金で品物が買える「現金掛け値なし」の販売方法が宣伝文句となり、看板に書かれた。



福の神とお金

For Prosperity in One's Business

福神（福の神）が描かれた錦絵（江戸時代～明治時代）には、福德（幸福や豊かさ）への人々の願いがあらわれている。えびすや大黒などの福神とともにお金や宝物が描かれ、縁起の良い絵として親しまれた。

商売の神 えびす和大黒

商家では、商売繁盛を願い、えびすや大黒があつく信仰された。



金のなる木

えびす和大黒への信仰は、室町時代から江戸時代にかけて広まったとされる。



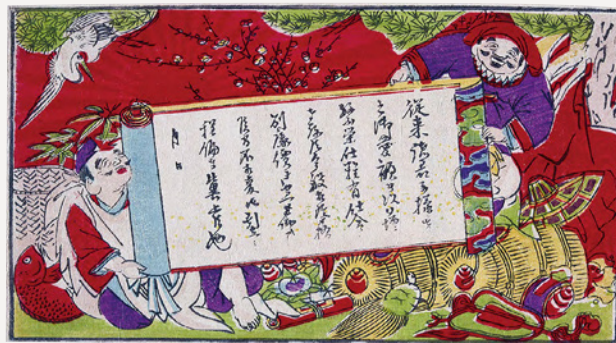
帳簿をつける福神

帳簿をつけたり蔵に荷を運び入れるなど、働くえびす・大黒の姿が描かれている錦絵も多い。大福帳やそろばんなど商家で使われた道具も描かれている。



えびす講

旧暦の10月20日などに行った商売繁盛を祈る商家の行事。えびすとともに大黒の像や絵を祀り、鯛や菓子を供え、親類・知人を招いて宴を催した。



広告のデザイン

えびす・大黒は、富の象徴として「円株」（広告）のデザインに数多く登場した。

紙幣にデザインされたえびす・大黒

江戸時代の藩札で富の象徴として用いられたえびすや大黒のデザインは、明治維新後にも引き継がれ、国立銀行紙幣ではえびすが、最初の日本銀行券では大黒が用いられた。



肥前島原藩札



国立銀行紙幣（新）五円



日本銀行券 旧五円券

庶民の旅ブーム —「道中日記」にみる支払い—

The Travel Fad Among Commoners: Payments Recorded in "Travel Diaries"

江戸時代の旅では、主に銭貨が支払いに使われた。人々は、道中で必要な銭貨を出発の時から持ち歩くのではなく、軽くてかさばらない金貨・銀貨で持ち、途中で少しずつ銭貨に両替しながら旅をした。また、盗難などの危険を避けるため、お金は目立たないようにして持ち歩かれた。

旅の支払い



「道中日記」

江戸時代後期

江戸時代、旅人は道中の日々の支払いを日記につけた。支払いだけでなく、旅で見聞きたさまざまなことを記した日記もある。



「道中入用帳」

江戸時代後期

3日間の旅での出費が記録されている。1日目に一分金を銭1貫300文に、2日目に二朱銀を銭648文に両替している。

旅でお金を持ち歩く

旅人は、高額金貨・銀貨と通常の支払いに使う銭貨を分けて持つなど、盗難に備えた。



脇差

脇差型貨幣入れ

江戸時代

脇差のようにみえるが、小型の金貨・銀貨などが入るように工夫されている。中が箱状になっているものなど、さまざまなつくりのものがある。



つば

つば型貨幣入れ

江戸時代

刀の鐺のようにみえるが、中に一分金などを入れることができる。



はやみち

早道

江戸時代

煙草入れや印籠のように腰にさげた。



成田山新勝寺（現・千葉県）へ向かう旅人が、銭貨を束ねた紐（さし）から銭貨を落とした場面。



「成田山参詣小金ヶ原之図」

人生とお金

Lifetime Expenditure

一生にかかる費用

江戸時代の人が生まれてから60歳まで生きていくために必要な費用を見積もった内容が記されている。



「人間一生入用勘定」

6歳から小遣いをもらい、10歳から14歳にかけて手習い(筆、硯、半紙など)にお金がかかり、15歳から酒を飲み始め、20歳ごろに結婚、61歳で隠居。酒肴、たばこが全体の約3割を占めている。

一攫千金の夢—江戸時代の宝くじ「富」—

富(富くじ)は、多数の富札を販売し抽せんにより賞金が当たる賭け事の一種で、江戸時代に流行した。箱に番号札を入れ、箱に開けた穴から籤で突き刺し(富突)、刺さった番号が当たりとなった。



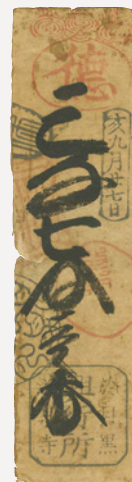
「万々両札のつき留」

富の様子

賭博性のある富は元禄期(1688～1704年)以降たびたび禁じられた。ただし、寺社が修繕費をまかなうために寺社奉行の許可を得て行う富は、「御免富」とよばれて特別に許可され、江戸・京・大阪を中心として各地で行われた。



谷中感応寺



目黒不動瀧泉寺



湯島天神

富札

谷中感応寺(現・天王寺)、目黒不動瀧泉寺、湯島天神の3ヶ所は江戸三富とよばれ、有名であった。